安政の森における多様な森林（もり）づくりの取組について

四国森林管理局　愛媛森林管理署　係員　　〇木村　有希
総括事務管理官　中尾　栄二

１　課題を取り上げた背景

公益的な機能を発揮する育成複層林への誘導は、森林・林業基本計画が策定された平成 13 年から推進されています。令和２年 10 月に開催された林政審議会においても、令和７年までに国内の森林面積の 30 万 ha 以上を育成複層林に誘導するという目標が示されました。

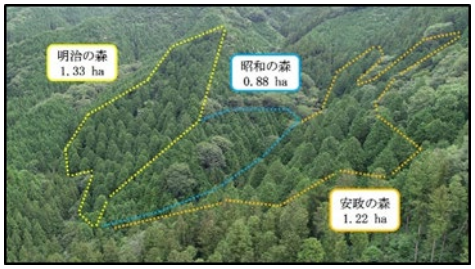
愛媛森林管理署管内の遅越（おそごえ）山 38 林班ほ１小班（以下、安政の森と記載）において、安政６年（1859 年）に植栽されたヒノキの旧藩造林地の樹下に、昭和 23 年および 62 年にヒノキが植栽されたことで３層の複層林が形成され、さらに昭和 61 年に安政の森は隣接する昭和の森、明治の森と合わせて複層林施業展示林に設定されました。

しかし、平成６年当時の当署職員、尾崎・坂本らによる報告を最後に林況の調査等は実施されていません。そこで、本研究は国民の指標となる育成複層林のモデルとして安政の森を維持するために、現在の林分状況の把握と今後の施業方針の検討を目的としました。

２　取組の経過

安政の森においては、平成 11・12 年に受光伐が実施されました。

調査方法は、安政の森は毎木調査、昭和・明治の森は標準地調査を実施し、胸高直径と樹高を計測し、結果に基づいて単木当たり年平均生長量と下層木の形状比を算出しました。



（写真１：調査地の概観）

３　実行結果

安政の森の上・中層木について、単木当たり年平均生長量の増加が認められ、受光伐の効果によって生育が改善したと考えられます。一方、昭和の森の上層木の生長が、同林齢である安政の森の中層木とほとんど差がなく、これは安政の森の受光伐による生育改善によるものと考えられます。

また、全体的に下層木の生育不良および枯損木の発生が確認されました。安政の森においては、上・中層木の生育によって照度が低下し、下層木の生長を制限していると考えられます。昭和の森においては、特に枯損が顕著であり、これは上層木の密度が高いためだと考えられます。明治の森においては、比較的に生長が良好でしたが、その形状比が平成６年の 71 から 81 に上昇し、形質不良木の割合が増加していると推定されます。

４　考察

安政の森：上層木を原則保残し、中層木の受光伐および形質不良な下層木の間伐を検討し、中層―下層木を 80 年―40 年サイクルで収穫する下木収穫型３段林を目標とします。

昭和の森：下層木の生育を改善し、今後も複層林としての林型を維持するために、受光伐の早期実施を検討し、上層―下層木を 80 年―40 年サイクルで収穫する上木交替型２段林を目標とします。

明治の森：上層木を原則保残し、安政の森と同じ林型を目標とし、上層木の密度が低いので、下層木の予備伐・更新伐を実施後、３段目の植栽を検討します。

今後の課題として、（１）上層木の伐採による下層木の損傷を抑える施業方法の検討、（２）シカの痕跡が確認されたことから、角こすりと食害から立木を保護する手法の検討が必要と考えます。